2026年9月2日公開

資料３



カタクチイワシ（太平洋系群）①

カタクチイワシは日本周辺に広く生息し、本系群はこのうち太平洋側に分布する群である。



図1　分布域

太平洋の沿岸域から沖合域にかけて広く分布する。産卵も、沿岸～沖合の広い海域で行われる。資源が少ない時代は、沖合域における分布量は少ない。

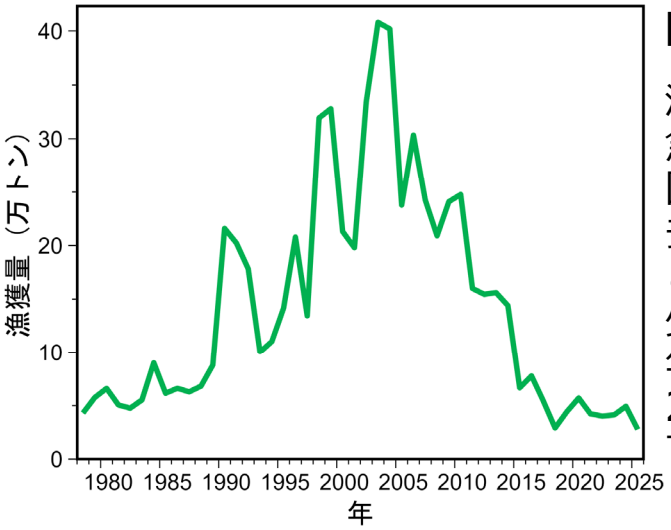


図2　漁獲量の推移

漁獲量は、1990年に急増し20万トンを上回り、2003年には過去最高の40.8万トンとなった。その後は減少傾向を示したが、近年は横ばい傾向にあり、2025年は2.8万トンであった。

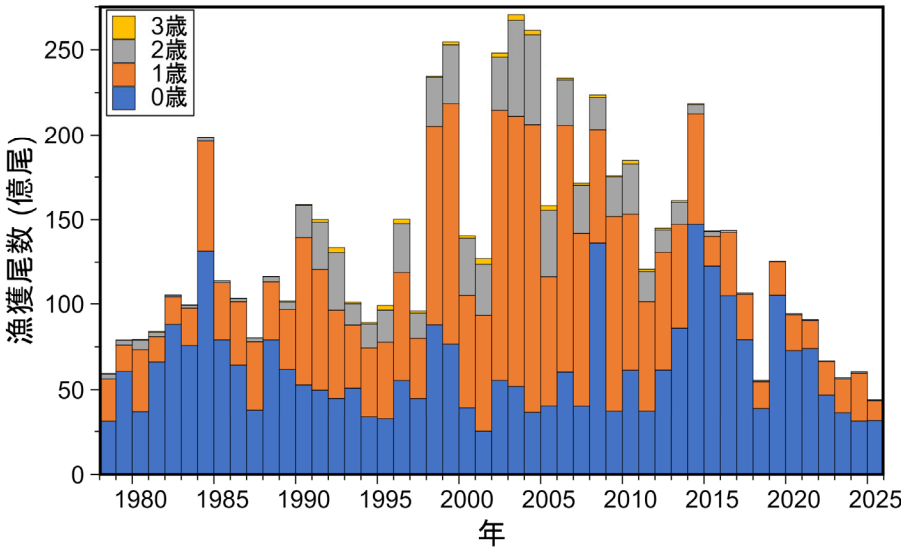


図3　年齢別漁獲尾数の推移

漁獲物の年齢組成を尾数で見ると、1990～2013年には2歳（灰）と3歳（黄）が概ね10%以上含まれていたが、2014年以降は0歳（青）と1歳（橙）が漁獲物の大部分（97%以上）を占めた。

カタクチイワシ（太平洋系群）②

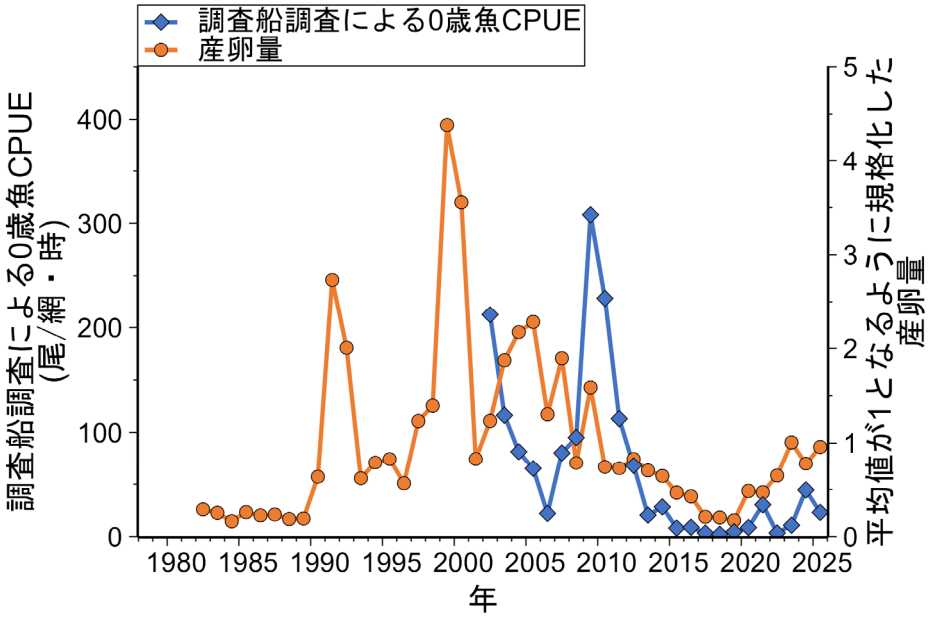


図4　資源量指標値の推移

加入量の指標である調査船調査による0歳魚CPUE（北西太平洋で5～7月に実施している中層トロール調査において1曳網1時間当たりに採集された尾数）は、2015年以降、低い水準で推移しているが、2021年、2024年には比較的高い値を示した。

親魚量の指標である調査船調査による産卵量は、1990年代に増加傾向を示した後、2000年代以降減少傾向を示し、2017～2019年には低い水準で推移したが、2020年以降は増加傾向となり、比較的高い値となっている。

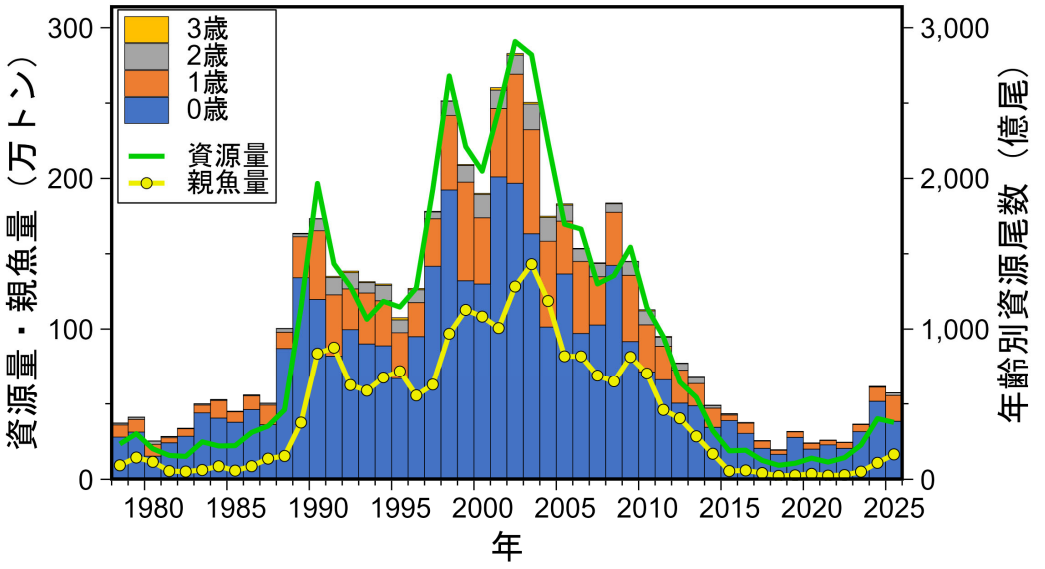


図5　資源量、親魚量および年齢別資源尾数の推移

資源の年齢組成を尾数でみると、0歳（青）と1歳（橙）を中心に構成されている。加入量（0歳の資源尾数）、資源量（緑折れ線）および親魚量（黄折れ線、丸印付き）は2000年代中盤から減少傾向にあったが、2019年以降は増加傾向にあり、2025年の資源量は37.7万トン、親魚量は16.5万トンであった。

カタクチイワシ（太平洋系群）③

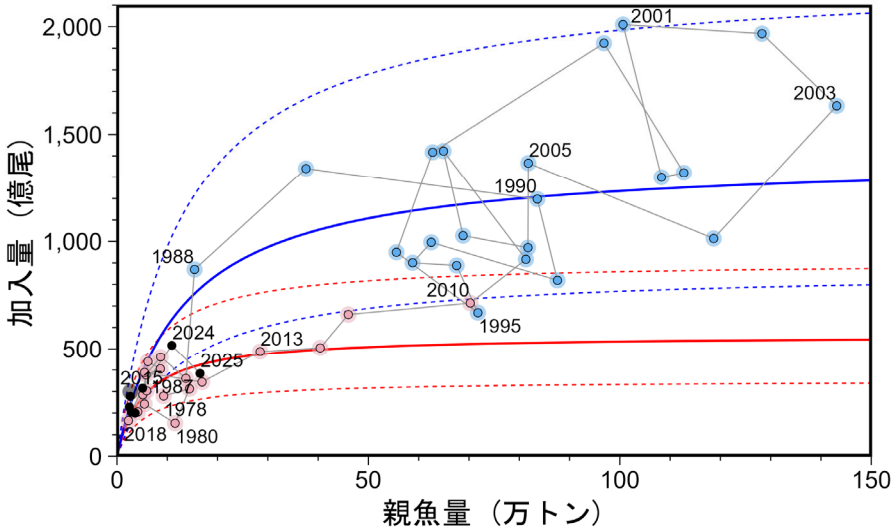


図6　再生産関係

通常加入期と高加入期で分けたベバートン・ホルト型再生産関係を適用した。通常加入期（赤太線）は、1978～1987年および2010～2018年（赤丸）の、高加入期（青太線）は、1988～2009年（青丸）の親魚量と加入量に基づく。図中の点線は、それぞれの再生産関係の下で加入量の90%が含まれると期待される範囲である。灰丸は2020年度評価に基づく2019年の観測値、枠線のみの丸および黒丸は2026年度資源評価で更新された観測値である。

※将来予測は通常加入期の再生産関係に基づく。

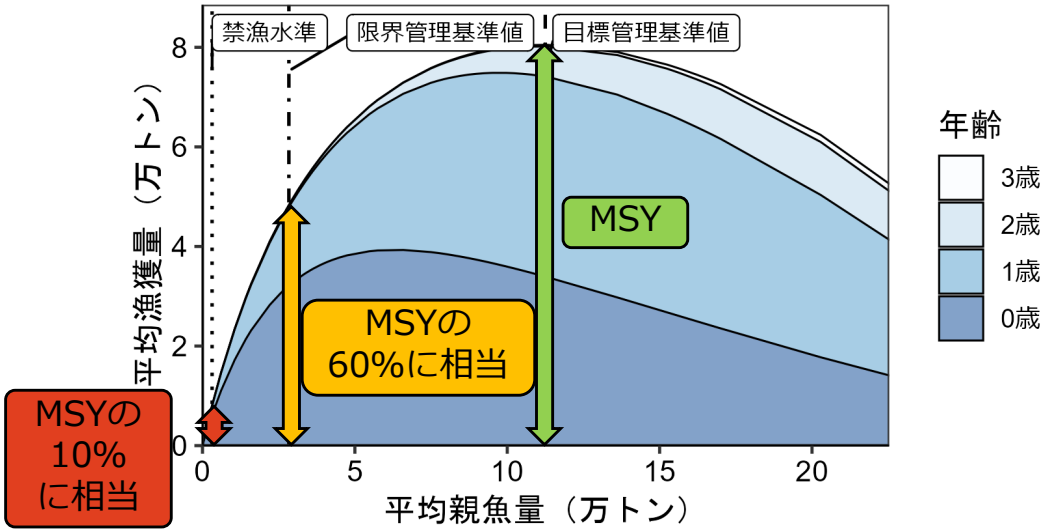


図7　管理基準値

通常加入期における最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は11.2万トンと算定される。当該加入期における目標管理基準値はSBmsy、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

目標管理基準値	限界管理基準値	禁漁水準	2025年の親魚量	MSY	2025年の漁獲量
11.2万トン	2.8万トン	0.3万トン	16.5万トン	8.1万トン	2.8万トン

カタクチイワシ（太平洋系群）④

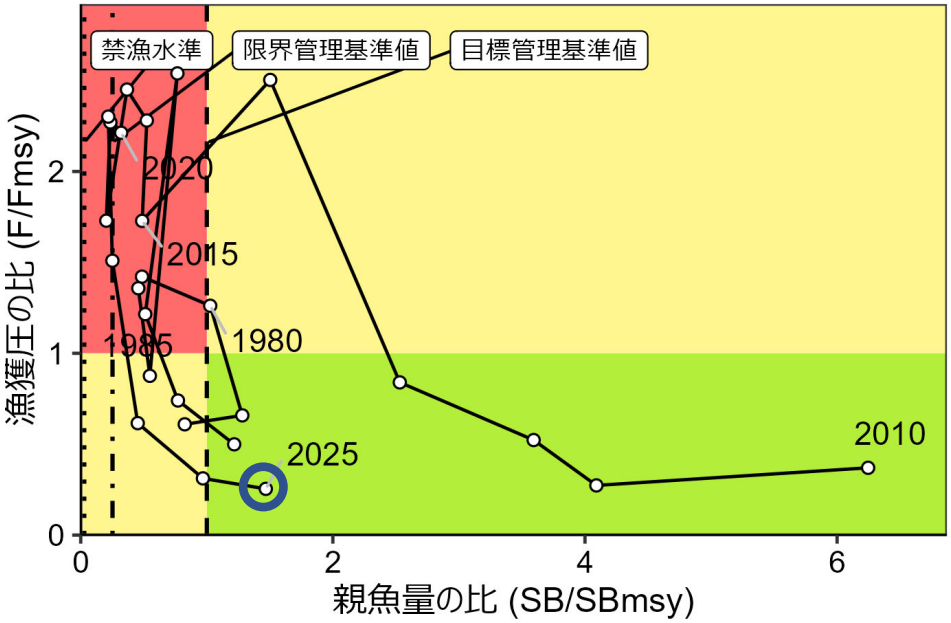


図8　神戸プロット（神戸チャート）

親魚量（SB）は、2010年以降では、2010～2014年に最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）を上回った後、2015～2024年には下回った。2025年の親魚量は、SBmsyの1.47倍であった。
漁獲圧（F）は、2010年以降では、2010～2013年にはSBmsyを維持する漁獲圧（Fmsy）を下回った後、2014～2022年には上回ったが、2023年以降はFmsyを下回っている。2025年の漁獲圧は、Fmsyの0.25倍であった。

※ 通常加入期（1978～1987年および2010～2025年）の結果を記載。

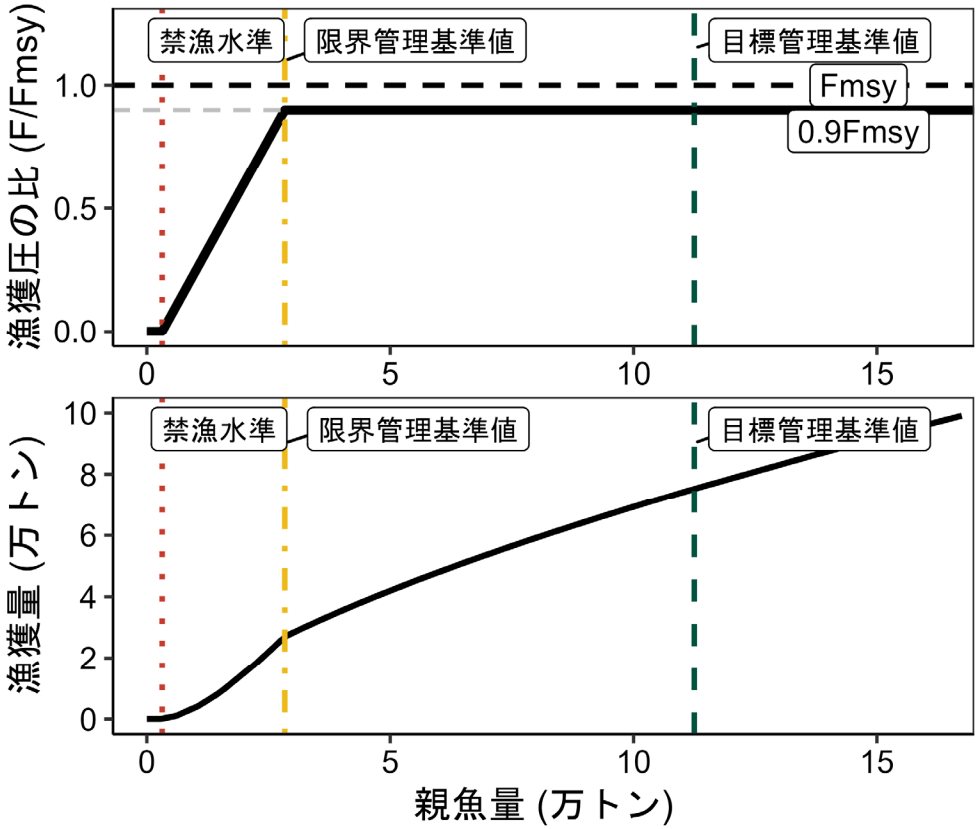
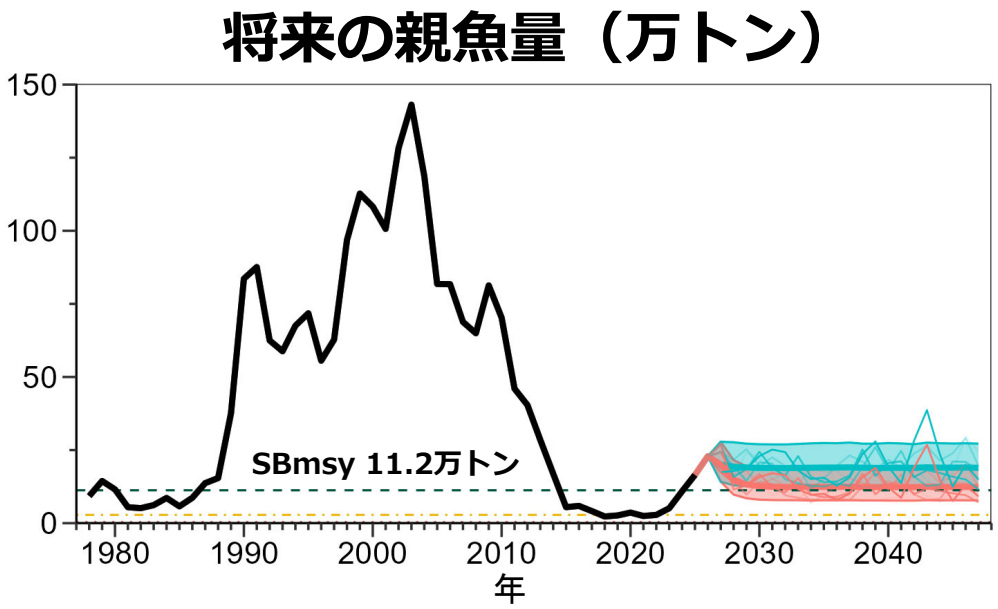


図9　漁獲シナリオ
（上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量）

漁獲シナリオ（調整係数であるβ=0.9）を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

カタクチイワシ（太平洋系群）⑤



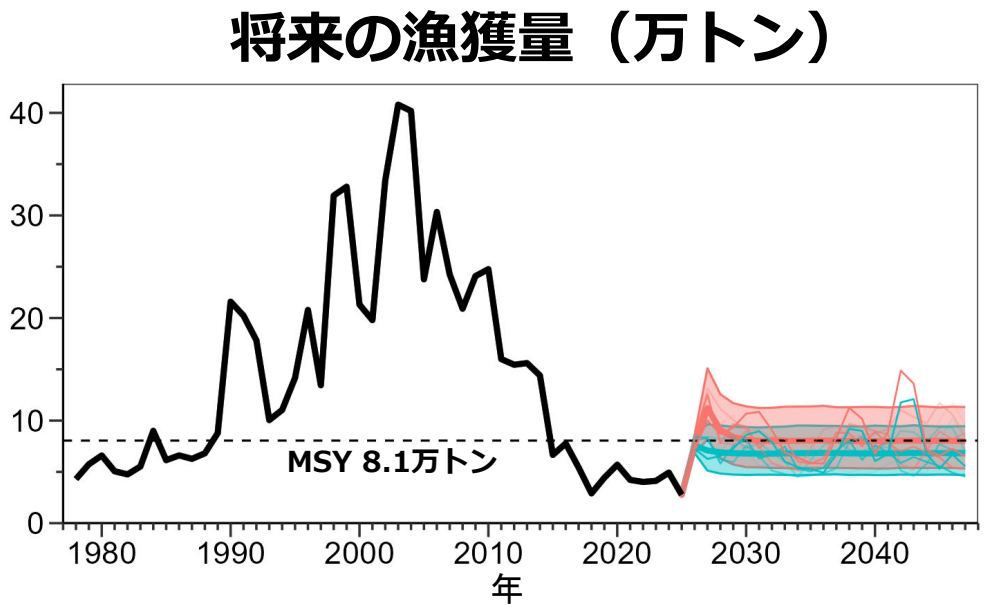


図10　漁獲シナリオの下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

漁獲シナリオ（β=0.9）に基づく漁獲を継続した場合の将来予測結果を示す。

平均値としては、親魚量はSBmsyよりも高い水準で推移するとともに、漁獲量はMSY付近で推移する。

漁獲シナリオに基づく将来予測（β=0.9）

現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

MSY

目標管理基準値

限界管理基準値

禁漁水準

カタクチイワシ（太平洋系群）⑥

表1．将来の平均親魚量（万トン）

β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2035年に親魚量が目標管理基準値（11.2万トン）を上回る確率
1.0	22.9	20.0	14.0	12.3	11.6	11.4	11.3	11.3	11.3	11.3	45%
0.9			14.8	13.3	12.7	12.5	12.3	12.4	12.4	12.4	59%
0.8			15.7	14.4	13.8	13.6	13.5	13.6	13.6	13.6	73%
0.7			16.7	15.6	15.1	15.0	14.9	14.9	15.0	15.0	85%
現状の漁獲圧			19.3	19.0	18.9	18.9	18.8	18.9	19.0	19.0	98%

表2．将来の平均漁獲量（万トン）

β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035
1.0	7.6	12.0	9.3	8.5	8.2	8.1	8.0	8.1	8.1	8.1
0.9		11.2	9.1	8.4	8.1	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0
0.8		10.4	8.8	8.2	8.0	7.9	7.9	7.9	7.9	7.9
0.7		9.5	8.3	7.9	7.8	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7
現状の漁獲圧		7.1	6.9	6.8	6.8	6.8	6.8	6.8	6.8	6.8

漁獲シナリオ（β=0.9、赤枠）に基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。2026年の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧（2023～2025年の平均：β=0.45相当）により仮定した。

この漁獲シナリオに従うと、2027年の平均漁獲量は11.2万トン、2035年に親魚量が目標管理基準値を上回る確率は59%と予測される。併せて、βを0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧の場合の将来予測結果も示した。

注：表の値は今後の資源評価により更新される。

表3．ABC要約表

2027年のABC（万トン）	2027年の親魚量 予測平均値（万トン）	現状の漁獲圧に対する比（F/F2023-2025）	2027年の漁獲割合（%）
11.2	20.0	2.02	28

補足：昨年度（令和7年度）評価結果からの変化とその要因

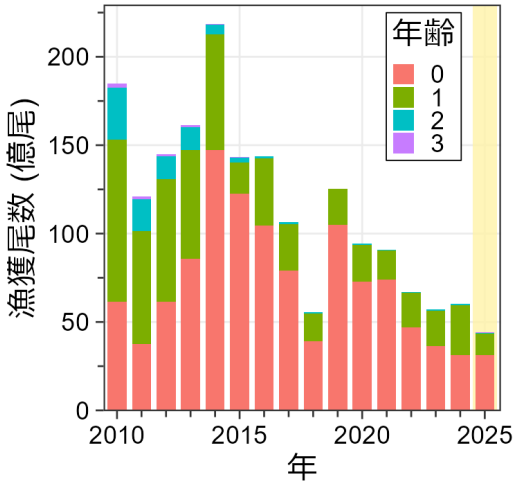
ポイント（昨年度評価からの変化）
- 2025年の漁獲尾数および漁獲量は過去48年間で最小であったが、資源量指標値※1が比較的高い値であったため（補足図1、2）、2025年級群の加入量（0歳魚の資源尾数）は比較的高豊度であると推定された（補足図3）
- 比較的高豊度の2025年級群と2022～2024年級群の豊度の更新により、2026年以降の将来予測の親魚量は上方修正された（補足図3）
- 2027年の予測漁獲量は8.9万トンから11.2万トン※2に上方修正された（補足図3）

※1 資源量指標値：資源量を反映していると考えられる指標であり、北上期調査における1曳網あたりの0歳魚漁獲尾数（CPUE）と卵稚仔調査における産卵量を標準化して使用
※2 2027年のABCに相当（β = 0.9）

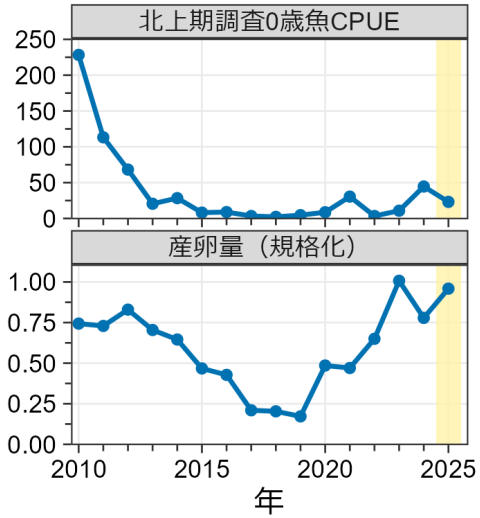
その他の主な変化とその要因など
- 2025年の数値が予測値から推定値に更新：2025年の加入量は昨年度評価の予測値と同程度であった。親魚量は近年の指標値の増加傾向を反映して予測値を上回った。2025年の漁獲量（2.8万トン）は昨年度想定した値※3を下回った。
- 2025年の0歳魚および親魚量の資源量指標値は近5年間では比較的高い値となった。
- 一方、2025年の漁獲尾数は近5年間で最小値となったが、その一因として漁獲圧の低下が考えられた。
- 2025年は房総海域や伊勢・三河湾において比較的良好なマイワシの来遊があり、それが漁獲圧低下につながった可能性がある。

※3 昨年度評価における2025年の漁獲量は過去5年（2020～2024年）の平均値で4.6万トン

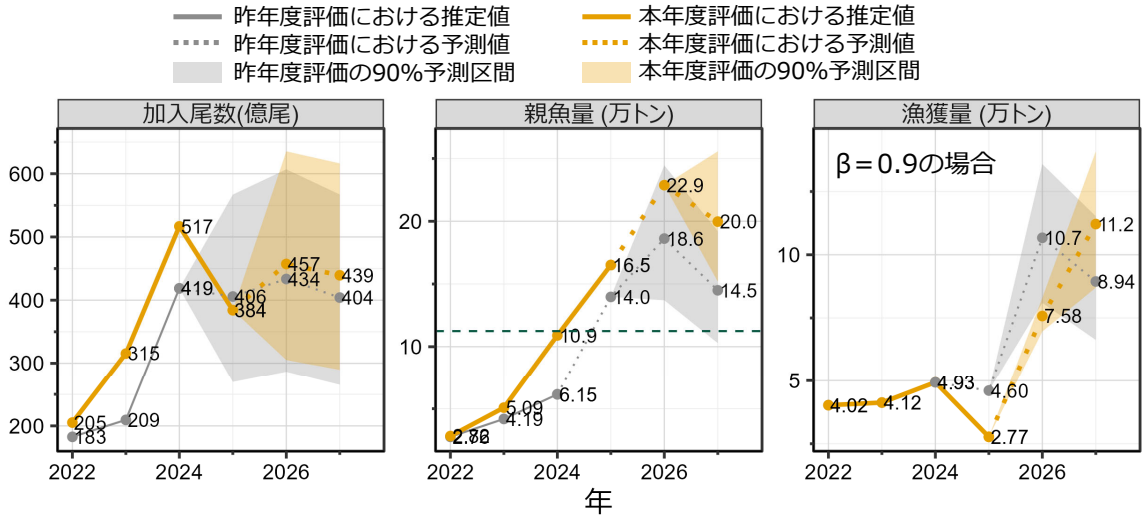
データの更新
- 2025年の年齢別漁獲尾数と資源量指標値※1を新しく追加
- 親魚量指標値の対象海域を見直し



補足図1　年齢別漁獲尾数



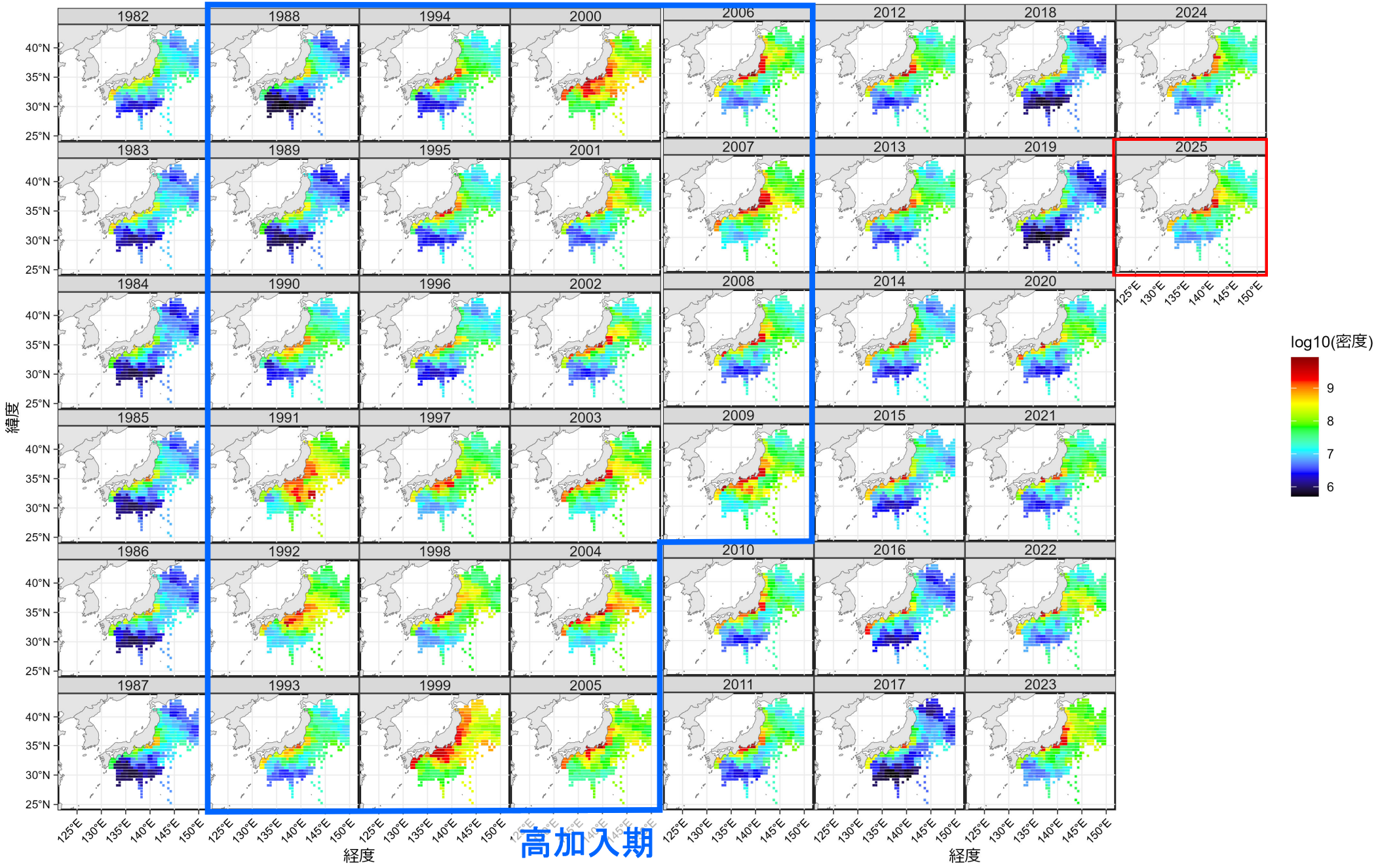
補足図2　資源量指標値



補足図3　本年度と昨年度の評価結果
2027年のABC：本年度評価における2027年の平均漁獲量（予測値）で11.2万トン
2026年のABC：昨年度評価における2026年の平均漁獲量（予測値）で10.7万トン
本年度評価における2026年の漁獲量7.6万トンは過去3年（2023～2025年）の平均的な漁獲圧を基に算出

補足：調査船調査による本資源の情報について

補足図4　産卵調査（周年）による卵密度の推移



補足：調査船調査による本資源の情報について

補足図5　中層トロール調査（5～7月）による0歳魚密度の推移

